



尾張旭ロータリークラブ

Weekly

「例会は親睦なり、深めよう親睦！」

・会長 井田 武憲
 ・幹事 桜井 雅博
 ・会報 占橋 裕志
 ・事務局 尾張旭市商工会館 TEL 0561-54-1263 FAX 0561-54-8945
 E-mail: owariasahi@mtc.ki-globe.ne.jp
 URL: http://www.owariasahi-rc.jp/

ふれあい、思いやり、そして握手

本日 第2036回 2012年11月30日(金) No. 1926

本日のプログラム Today's Program

卓話担当者: 高島 昇君

点 鐘

卓話者: 版画講師 水野 アー 様

ロータリーソング「日も風も星も」

演 題: 「版画の楽しさ」

前 回 第2035回 2012年11月16日(金) 記 録

- 齊 唱: 「我等の生業」
- ゲスト: 名古屋経営短期大学 渡部 琢也様
名古屋経営短期大学 近藤 城史様
- 出席者: 会員29名中20名出席 出席率68.96%
前々回補正出席率は11月2日分93.10%



△ゲストスピーカーの渡辺 琢也様(左)と近藤 城史様

々の流派の昇段審査会がありました。一級から初段、二～五段、奥伝まで7年間、その後、成士、成範、範士、総範認許までに17年間の歳月がかかりました。入門当初に習うのが「いろはうた」です。この基本の詩に節をつけて吟じますが、これがまた一苦勞でして今でも修練途上にあります。

「色は匂(にほ)へど散りぬるを、わが世誰(たれ)ぞ常ならむ(ん)有為(うゐ)の奥山(おくやま)けふ越えて、浅き夢見じ酔(よ)ひもせず。」
(色美しくさいていても、花は散ってしましますが、私たちの人生も、いつまでも同じようではありません。そういう人生の山道を、今日もこえていくのですが、浅い夢を見ていたり、ぼんやりとしていては、この世の本当の姿を知ることにはできません。)

俗に弘法大師の作ともいわれておりますが、なかなか味わい深い趣があると思っておりますが、いかがでしょうか・・・。

会長あいさつ 井田 武憲

今日は、詩吟についてお話したいと思います。詩吟(漢詩に節をつけて吟ずること)の修練を始めて約30年になります。11月11日(日)に我

幹事報告

- ・本日の会合: なし
- ・次回の例会: 法定休日ので例会はありません。
- ・例会変更のお知らせ: 別紙。

家族月間

	12月 7日 (金)	12月15日 (土)	12月21日 (金)	12月28日 (金)
例会予定	年次総会 クラブフォーラム 卓話担当者: 会員増強委員会 卓話者: 西尾 輝久君 演 題: 「会員増強について」	14日(金)振替 年忘れ家族会 於ヒルトン名古屋 4F 櫻 点鐘 18:00	卓話担当者: プログラム委員会 卓話者: 尾張旭市役所 健康推進室 豊田 定史様 佐川 真彩様 演題: 「第5回健康都市連合大会の報告」	休 会 (第6条第一節により)
3分間スピーチ	大野 良之君	—	西尾 輝久君	



△ 傘寿の祝の飯田 幸雄君（右）

ボランティア活動報告会

日時 2012年11月17日（土） 10:00～
場所 名古屋経営短期大学 文化ホール



△短期大学学生の参加報告

△旭労災病院先生の体験談

ニコボックス

○傘寿のお祝いをいただきまして、ありがとうございました。 飯田 幸雄君
○加藤勇夫さん、セッティングありがとうございました。 鮫鱈の会出席者より
○名古屋経営短期大学、渡辺先生、近藤先生、今日、明日とよろしくお願ひいたします。

井田 武憲君、古橋エツ子君
○名古屋経営短期大学 渡辺先生、近藤先生の卓話を楽しみしております。

桜井 雅博君、浅野 善吉君
飯田 幸雄君、唐井 仁一君、箕輪 良孝君
○庭先に 紅く燃ゆる 唐楓 古橋 裕志君
○谷口先生には夫婦でお世話になっていて、ありがとうございます。これからもよろしくお願ひいたします。 丹羽 敏行君
○反省会ご苦労様でした。また反省することが増えてしまいました。 箕輪 良孝君
○箕輪君、反省会ではお世話になりました。 西尾 輝久君

○決められる政治の復活を願って。

木村玄次郎君
○西尾さん、写真をありがとうございます。 古橋 裕志君

卓話

「東北ボランティア事業報告」

渡辺 琢也・近藤 城史

東日本大震災が発生し、日本は未曾有の災害に見舞われました。今回の震災で津波によって多くの方々が犠牲となり、また、原子力発電所も震災に見舞われ依然として放射能への不安な状況が続いています。名古屋経営短期大学が所在している東海地域は以前より大規模な地震が発生する可能性が高いと言われ続けている地域です。現在もいつ発生してもおかしくない状況が続いているともされています。本学の関係者はこのような地域に立地していることも踏まえ、学生にとどまらず、教職員も含めて今回の大震災を学び、経験として受け継がなければならないと考えています。そこで尾張旭ロータリークラブとも連携し、学習目的も含んだKEIKITANボランティア隊の活動を実施したいと考えています。

「東北ボランティア活動報告」

森井 晴生

東日本で起きました未曾有の大震災につきまして、私どもが震災直後から今日まで行ってまいりました救援活動を学生さんに紹介してほしい、とのご依頼を賜りましたので、本日お邪魔した次第です。皆様方のご参考になれば幸いと存じます。

さて、この大震災に際しまして、私ども天理教名古屋大教会は宮城県・岩手県内に10ヶ所の部下教会がございますので、そこを前線拠点としての救援物資配布活動を震災直後の3月16日から開始しました。本当はもっと早くに物資をお届けしたかったのですが、様々な要因から5日後となったのです。そのことについてまず少し申し上げますが、私は震災当日、津波のあの惨状をテレビで目にするや、即座に現地への救援隊派遣を決定し、その準備にかかりました。しかし、大震災に日本中がパニックになり、食料、水、燃料などの買い占めが始まっておりまして、様々な物資が店頭からなくなっていきました。それでもあらゆるつてを頼り、遠くは大阪まで足を伸ばして大量の水や米、また生活必需品を用意しました。また、尾張旭や名古屋の有志の方々にも救援物資拠出をお願いし、多くの方々から心温まるご協力をいただきました。

これら、救援物資輸送で特に重要な鍵を握るのは燃料です。私は、被災地をはじめ途中の経路もガソリンは全く手に入らないと判断し、派遣車はディーゼル車に限定しました。なぜかと申しますと、ディーゼル車の燃料である軽油は、簡単に発火しないため、法律上でもドラム缶やポリタンクで運ぶことができるからです。それに比べガソリンは揮発性が高く、持ち運びが危険で、専用の携行缶でしか運ぶことができません。しかもこの携行缶も震災2日後には、全て買い占めで店頭からなくなり、100リッター分を用意するのがやっとでした。

また、いかに早く物資を運ぶか、いかに限られた燃料で効率よく現地入りするかを考慮しまして、たどり着いたのが、災害救援緊急車両の申請です。これが受理されると、当時、一般車両は入れなかった高速道路も通れることができ

ますので、早速、愛知県警に申請しました。

しかしその間、現地とは全くといっていいほど連絡がとれず、どのルートを通れば現地に入るか、地図とにらめっこをする時間が随分続きましたが、山形県北部の尾花澤にあります私どものメンバーが雪深い中、峠を越えて宮城へ入り、被害の程度や道路の状況、どのルートを通ったらよいかを私どもに知らせてくれました。

これを受け、待ちに待った緊急車両の申請が受理された3月16日、2トントラックと4トントラックに2本のドラム缶、1本は私たちが活動するための軽油を、もう1本には3月まだ寒い最中ですので、被災された方々が暖をとるのに欠かせない灯油、そして水、米等さまざまな救援物資を満載し、第1便が出発し、翌17日には宮城県へ物資・燃料を届けることができました。

この救援物資運輸送・配布活動は、その後も5月5日までの2ヶ月間で全て15便、のべ156名のスタッフで4トントラック約30台分の物資を宮城県内15市町と岩手県内4市町に届けさせていただきました。

自治体を通じての救援物資供給はというと、配布の陣頭指揮に立つべき市町村の職員が津波の犠牲になって自治体がなかなか機能せず、また、分配の公平性にとらわれたりしてもたついていた中、私たちは地縁や人の縁を頼って先へ先へと進みましたから、2日間飲まず食わずで間一髪助かったという方々のところや、震災後一週間経ったにもかかわらず救援物資が何一つ届いていないという地区までに食料や物資をお届けすることができ、大変喜んでいただきました。

とにかく、一旦このような震災が起こると様々なことが機能停止します。当たり前なのが当たり前でなくなります。そういうことも踏まえて、日頃いかに備えるべきかという点が大切だということを痛感いたしました。

さて、震災後2ヶ月を経て被災地もだんだん落ち着き、流通が回復してきましたので、救援物資の活動は終えることとし、第2段階として被災地の復旧・復興活動に切り替えることにいたしましたところ、あるご縁から南三陸町のボランティアセンターを拠点にボランティア活動をさせていただくことになりました。その活動は5月8日の第1次隊から数えて、本年11月15日現在で計40次隊が出動し、のべ1253名が瓦礫撤去や漁業支援、炊き出し等のボランティアに励んでまいりました。

このボランティア活動には、大相撲名古屋場所私どもが2年前より宿舎を提供しております阿武松部屋からも、親方ご夫妻はじめ、力士7名が昨年参加されまして、ともどもに汗を流してくださいました。また、皆さんと同じように、私ども天理教とは全く関係のない若い人たちも趣旨に賛同し、多勢参加して下さいました。

このボランティア活動を通して一番ありがたかったのは、南三陸の現地の方々とお近づきになれたことです。

そういう現地の方々、辛い思いを秘めて、い

つも温かく私どもを受け入れて下さっている被災地の方々へのささやかな感謝のしるしとして、南三陸町の方々を大相撲名古屋場所にご招待し、相撲観戦を通して少しでも明るく前向きになっていただきたいと思い、去る7月17日から19日までの大相撲観戦バスツアーを実施し、30名の被災者にお越しいただきました。当教会にお泊りいただき、会場では貴乃花親方のお出迎えも受けて相撲をナマで観戦され、大変喜んでいただきました。「震災後、こんなに素直に大声で笑ったことはない」と、参加者の代表は喜んで下さいました。このことは中日新聞にも紹介いただきました。

こうやって、ますます現地の方々と絆を持たせていただいた私どもは、この大相撲観戦ツアー後、これまでのボランティアセンターを拠点とした瓦礫撤去主体の活動から、ツアー参加者をつてに、現場の生の声を生かした、より密着した様々な活動を繰り広げようと、第3段階へ今進もうとしています。

被災者のこれまでをざっと見てまいりますと、災害当初はとにかく飢えをしのぎ、生き残ることが最優先でした。1本のペットボトルの水のありがたさ、1個の塩むすびの美味しさが忘れられないと被災者は仰っていました。と同時に、その後連日同じものが与えられたために、今では弁当やカップ麺は体が受け付けないとも語っていました。

また、飢えとともに寒さをしのぐことも大変でした。避難所へ移っても、すし詰め状態の中、体調を維持するのが大変で、プライバシーを確保するのも段ボールだけでした。そういう過酷な避難所生活も、3、4ヶ月経つとぼちぼち仮設住宅ができてきましたので、そこに移ることになり最低限度の生活は確保されるようになりました。

さて、この仮設住宅での生活ですが、それこそ抽選で選ばれた人たち寄せ集めで来るわけです。これまでの同じ地区の人々同士が集まれないということで、当初からコミュニティーが崩壊してしまいますから、仮設住宅に移り住んでもストレスがたまり、引きこもり、うつ病などの症状を持った人たちが増えていくという問題も起こっております。

愛する人を失った人、命は助かったが家・財産を流された人、辛うじて家は残ったが、残ったがゆえに仮設住宅にも入れず、仕事も収入もない中、自前でリホームしなければ生活できず、支援を全く受けられない人、というように、被災地にはいろいろなケースの苦難を持った人がおり、その人たちは相手と比較して自分が置かれている状況を嘆き、果ては相手と諍いをおこすというようなことが、今実際に表面化しております。そして大人たちの諍いは子供たちにも波及し、町全体が陰悪なムードを醸し出しているというのも、被災地の悲しい現実でもあります。

震災当初はみんな協力し合って命の炎を絶やさずしてきたんですから、それを思い起こして

いただいて、何とかそのような状況を打開し、助け合いのできる町へとになっていただくためにも、私どもはこれまでのボランティアセンターを拠点とした活動に加えて、新たなコミュニティーの構築や交流を図れるような活動をメインにしていこうということで、この秋から行っているのが、炊き出しと子供会活動です。

置かれている状況は様々ですが、同じ地域に生活している方々が一堂に会し、同じ釜の飯を食べながら談笑し、子供同士が無邪気に遊ぶ、この炊き出しと子供会活動は、新たなコミュニティー作りに大変有効であると思っております。

東日本大震災の被害者、私どもは主に南三陸町の方々しか知りませんが、その方々は家族や知人の誰かしらを失っています。自分だけが助かってしまったというような方もいらっしゃいます。まさに家族や財産、仕事を一瞬にしてなくしてしまった喪失感と、自分だけが助かったという謂れなき罪悪感に、今もさいなまれておられる方々ばかりです。その方々の話を聞けば聞くほど、形の復興もさることながら心の復興の難しさをつくづく思い知らされております。

また、現場の声として皆一様に仰有るのは、被災地の現状をつぶさに見てほしいということです。1年8ヶ月も経って、メディアの取り上げ方も激減し、日本中・世界中の人々は、もはや被災地は復旧・復興に向かっていると思っておられるでしょうが、瓦礫がかたづけただけで、何も前には進んでいません。どうかその現状を自分の目で見てもらいたいというのが、一番切実な叫びだと思えます。その意味でも、若い皆さんがこの機会に問題意識を持っていただいて、その上で現場へ足を運んでいただきたいと思います。

私は壊れた「心」を癒すことができるのは「人の真心」しかないと思っております。ですから、私どもは今後も真心をもって被災地の形の復興・心の復興に微力ながらつとめてまいりたいと思っておりますし、どうか皆さん方にも、どんな形でも結構ですから、被災地、被災者に真心を注いでいただければありがたいと存じます。

私ども名古屋大教会のボランティア内容として、瓦礫撤去や農漁業支援、炊き出し、子供会活動等をしております。炊き出しでの一番の目的は、被災された方同志がコミュニケーションを図るお手伝いをさせていただくということです。仮設を住まいとしている方々と自宅に住んでいらっしゃる方々とは、打ち解けられますよという思いで進めさせていただいております。現に、炊き出しにいらっしゃる皆さんは料理だけでなく、おしゃべりを楽しんでお帰りになります。

また、南三陸町の次世代を担うであろう子供たちが、良い関係をたもてるようにお手伝いをして欲しいという向こうからの要請を聞き、いろいろ考慮しました上で、炊き出しの横でビンゴ大会をすることにしました。当初は子供を対象にしていたのですが、いざ始めてみますと、下は幼児から上はビンゴとは何かという説明から始めなければいけない90歳を超えたご老人まで一緒になって楽しんで下さいました。その中で、一人の子供が私の元へ近づいて来てこう言いました。「ビンゴの紙、穴をあけて裏から見るとお墓がたくさんあるみたいだね。」想像出来ますでしょうか？ビンゴは数字が出たら穴をあけるゲームです。その穴を空いた状態の紙を裏返すと、お墓に見えるというのです。私は何と答えていいのかわかりませんでした。まさに死を目の当たりにした子供だから出てくる言葉だと思います。あの震災から1年8ヶ月が過ぎました。あれだけ衝撃的で、日本をパニックにした震災ですが、たった2年弱の月日が流れただけで、私どもの中では、だんだん記憶が薄れつつあります。しかし被災地の方々にとっては、過去の出来事ではありません。隣の町へ行く際も海岸近くの道路を通ったら早いところをいまだに被害を受けた自分たちの町を見ることができず、わざわざ舗装されていない山道を通って長い時間をかけて出かけられます。今の被災地に、今だからこそ求められたいことは、そういった方々の話を聞かせていただくことだと思います。私どもはあの震災を直接経験していないので、話を聞くだけでは100%共感をする事は不可能です。ですがそれは向こうの方々も理解していらっしゃいます。被災者同士では話せないが、私ども経験していない者にだからこそ話せることもたくさんあります。また、あちらの皆さんは私どもに話をして、答えを導いて欲しいわけではなく、私どもはただ聞かせていただくだけで、その中からご自分で納得し、ご自分で答えを導かれているのです。被災地は震災でご家族や知人を亡くされた方ばかりです。また、自分一人だけが残ってしまったという罪悪感にかられてる方も多くいらっしゃいます。メディアで映されている被害はほんの一部でしかありません。全てが真実だとは限りません。その中から、本気で復興を願い、本気で何かのお手伝いをさせていただきたいと思うのであれば、自分で見て、歩き、何が大切かをしっかり感じ取って行くことが求められています。



△森井 晴生会員（右）と娘さんの初枝様です。